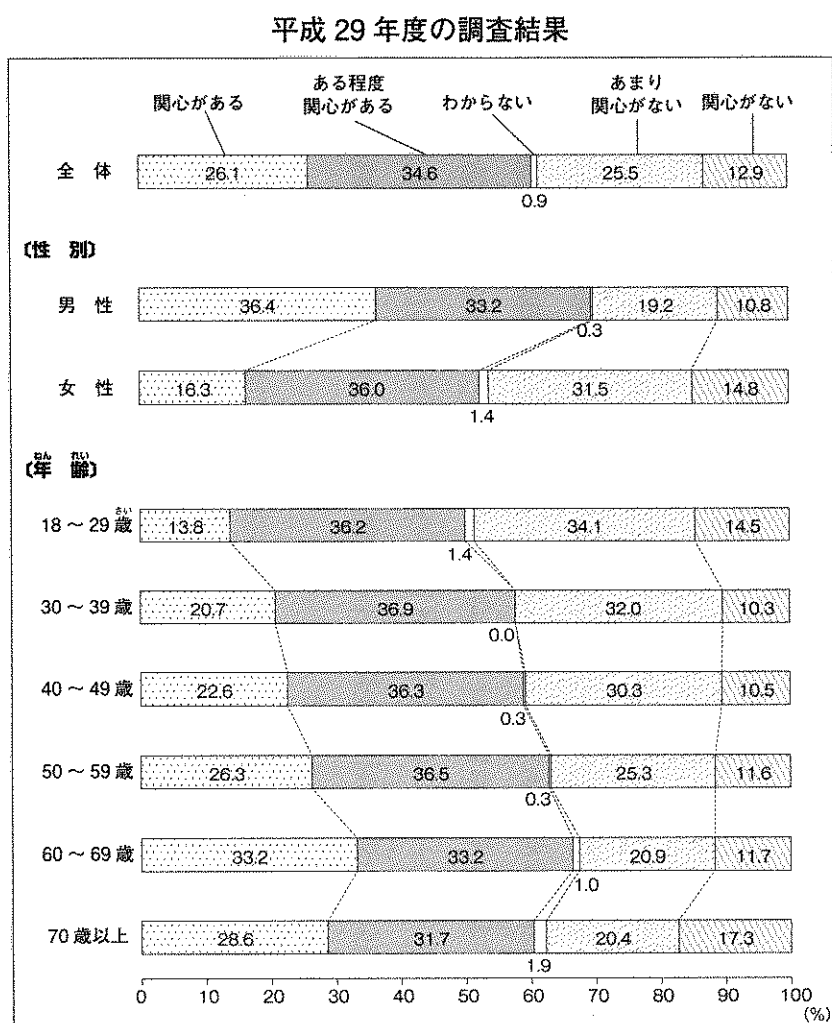


【二】次のグラフは、世論調査で「科学技術についてのニュースや話題に関心がありますか」とたずねた結果を男女別・年齢別に示したものです。グラフから読み取れることとして適当なものを、後のア～オの中から二つ選びなさい。



（平成29年度「科学技術と社会に関する世論調査」による）

ア 「関心がある」割合と「関心がない」割合がそれぞれ最も高いのは、ともに六十歳代である。

イ 「関心がある」「ある程度関心がある」割合の合計は、五十歳代と六十歳代で「全体」を上回るが、七十歳以上では「全体」を下回る。

ウ 三十歳未満で「関心がある」割合は全世代のなかで最も低く、逆に「あまり関心がない」「関心がない」割合の合計は最も高い。

エ 「女性」で「関心がある」割合は「男性」の半分以下であり、「ある程度関心がある」割合を加えても女性全体の五割をこえない。

オ 「ある程度関心がある」割合は年齢が上がるにつれ低くなっていくが、六十歳未満では世代間の差はほとんどなく、1ポイント以内におさまっている。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昭和三十六年、大島吾郎が千葉県習志野市立野瀬小学校に勤めて三年目のことだった。明治の末に建てられた野瀬小学校は、増築につぐ増築により、目下、三棟の木造校舎を連ねている。そのもつとも古い棟の一階北端にあてがわれた吾郎の仕事場兼住居は、用務員室という正式の名称があるにもかかわらず、一部の学童から「大島教室」と呼ばれていた。

学校の教員たちよりも年若の吾郎は、そのぶん子どもたちとの垣根が低かったのだらう。吾郎さん、吾郎さんとしたつてくる子たちと遊んでいるうちに、ある日、一人の男子から「勉強がわからない」と泣きつかれた。頼まれるまま用務員室で勉強を見てやったのが事の始まりだ。吾郎さんに教わるとよくわかる。そんなうわさがみるみる広まり、ぼくも、私もと子どもたちが集まってくるようになった。今では連日二十人近くが押しよせるため、卓袱台一つの六畳一間は常にぎゅうぎゅうづめである。

「吾郎さん、宿題ができません。」

「授業についていきません。」

「今日一日、先生が何を言っているのか、ひと言もわかりませんでした。」

放課後、五十余名がひしめく鯨づめの学級からようやく解放され、這々の体で用務員室にやってくる個々のうったえは

I

ながらも、共通しているのはみなが一様に瞳をきよろきよろとさまよわせていることだった。

勉強ができない子は集中力がない。集中力がない子は瞳に落ちつきがない。この「瞳の法則」を見いだして以来、吾郎はまず何よりも彼らの視線を一点にすえさせることに腐心した。

わからない勉強をわからなければならぬ、というあせりでいっばいの心を落ちつかせる。それが最初の一步だ。急ぐことはない。あれこれといっぺんにつめこむ必要もない。まずは神経をしずめ、考える力のすべてを目の前の一間へそそぐこと。その一歩さえふみだすことができれば、多くの子はおのずから歩みだす。

彼らはいったん集中のこつをつかむとすぐに化け、中にはたった数回で大島教室を卒業していく者もいる。吾郎さん、ありがとう。笑顔で去っていく彼らの瞳はもはや

II

していない。

だからこそ、まだ一年生の落子が初めて用務員室へあらわれたとき、その視線のゆらぎのなさに吾郎は虚をつかれたのだ。

勉強ができない子の目ではなかった。

実際、落子に教えを請われた算数の計算問題を説明しているあいだも、吾郎には違和感がつきまとった。それまでわからなかったことがわかった瞬間、子どもたちはぽんと音が鳴るような「わかった顔」をするものだ。が、落子にはそれがなかった。かといって理解していないわけでもなく、与えた問題はどれも難なく解いてみせる。教える前からこの子はわかっていただけていたのではないか。いや、しかし、だったらなぜここにいるのか。

「吾郎さん。」

吾郎の混乱に輪をかけるように、落子は突如、算数とは関係のない問いを放った。

「吾郎さんは、用務員さんなのに、どうして勉強を教えてくださいさるんですか。学校からお手当をもらっているのですか。」

聴することのない直球に吾郎は面食らった。

「いや、そんなものはもらえないよ。これは、ぼくが好きでやつてることだから。」

「好き？」

「君たちといると楽しいし、勉強ができるようになっていく姿を見るのもうれしい。」

「じゃあ、どうして、学校の先生にならなかったんですか。」

② これまた痛いところをつかれた。ふだんならば適当にごまかすところだが、どこまでもまっすぐな落子の目に吾郎はうそを返したくなかった。

「ぼくが高校生のとき、親父があきなっていた問屋がつぶれてしまって、ぼくも働くことになってね。職業を選んでいる余ゆうはなかったんだ。」

③ それまでゆらぎのなかった落子の瞳が初めて波立った。知ただけでなく情もある子だ。吾郎はほほえみ、そのおかつば頭に手をのせた。

「大丈夫。ぼくは今の仕事に満足しているよ。ばく然と、人の役に立つことがしたかったんだ。」

④ 神妙にうなずいてみせた落子は、その日以降、定期的に用務員室を訪れる常連の一人となった。たいていは算数か理科の教科書を胸にかかえて来る。しかし、何をどう教えても、吾郎には彼女が本気で助けを求めているとは思えないのだった。

⑤ 懇意にしている教員の矢津文彦に頼み、一年九組の学級内における落子の成績を調べてもらったのは、考えあぐねた末のことだ。予感的中。予想外だったのは、申し分のない成績とともに告げられた彼女の家庭環境だった。

「赤坂落子は少々複雑な家の子みたいですね。母親は結婚せずにひとり身のまま彼女を

生んでいます。今は、祖母と母親と、女三人の暮らしのようですよ。」

そんな内幕を知つて以来、吾郎はいよいよ落子のが気になりましたのだが、たとえ事情をかかえた家庭であるとしても、赤坂家の暮らしむきがそう悪いようには見えなかった。落子はいつも清けつなシャツとスカートを身につけているし、セルロイドの筆入れももっている。児童の大半がアルミ缶やビニール製の筆入れに鉛筆を入れている今日日、高級品のセルロイド製は垂涎的である。

むろん、金銭的にこまっていないにしても、今の暮らしに満たされているとはかぎらない。ひょっとして、落子は自分に父親のぬくもりを求めているのか。うそをついてまで用務員室に通うのはそのためか。吾郎はそんな深読みさえしかけたが、しかし、落子はけっしてべたべたと甘えてくるような子ではなかった。常に一定の距離をへだてた先からそそがれる視線には、父を求める子というよりもつつしみ深い観察者の鋭利さがあつた。

胸のもやつきが晴れないままに季節は流れ、用務員室をしゃく熱地獄に変えた夏を脱したころ、ついに決定的な事件が起こつた。

毎夕、小一時間ほど子どもたちの勉強につきあうのが日課の吾郎だったが、その間にもちよこちよこと雑用に追われることはある。その放課後も、学校の校庭に野良犬が出たとの報を受け、しばし大島教室を中座した。犬を追いはらつた彼が戻つてきたとき、落子は同級生の女兒に算数を教えてやつていた。

吾郎があつけにとられたのは、そこで教授されていた問題こそ、まさにその日、彼が落子から教えてほしいと請われたものだったからだ。

しかも、落子はお姉さん然としてかまえ、「こっただけ見て」「これだけ考えて」と吾郎の口ぐせを連発している。「順番に、一つずつよ」。まるで吾郎二世だ。

「落ちゃん。吾郎さんが……。」

周囲の忍び声にはたとふりむいた落子が真っ赤に頬を染めた。初めて目にした子どもらしい反応に、瞬時、吾郎の腹からせりあがってきたのは爆発的な笑いだった。

仕事場では極力おさえているものの、本来、彼は大変な笑い上戸なのである。何がおかしいのかわからないと人が首をかしげるところでも、自分のつばにはまればいくらかでも笑う。落子の「吾郎面」はまさしくつばで、子どもたちの当惑を前にしても、よじれた腹のけいれんは治まるところを知らない。

落子のすすり泣きに気付いたのは、笑いの発作が引いてからだつた。
しまった、と我に返るも、もうおそい。

「吾郎さんが落ちゃんを泣かした。」

「笑いすぎて泣かした。いけないんだ。」

上級生たちがはやすほどに泣き声は高まり、ついに落子はかけ足で用務員室を飛びだしていった。みなに自習を言いつけ、吾郎もあわててそのあとを追つた。

西日に赤らむ校庭には今日も所せましとはねまわる子どもたちの影が点々としていた。校舎増築のたびに目減りする土を奪いあうように、メンコやベーゴマ、鬼ごっこなどに興じている。はしやぎ声が飛びかうその波をかくぐり、吾郎は落子をつかまえた。

「ごめんよ。笑つて悪かつた。ただ、うれしかったんだ。本当の君を見られて。」

「え。」

「君がわかつてるのは、わかつてたから。」

落子の嗚咽が止まつた。そろりと吾郎を見上げたその顔には、ばつの悪さと安どの色が同居している。

「吾郎さん。うそをついてて、ごめんなさい。」

「理由があるんだよね。君は、大人をからかつて楽しむような子じゃない。」

その言葉に、花をしめらす朝つゆみtainな涙がほろりと頬を伝うのを見て、吾郎は無しように落子がいとおしくなつた。

「どうしてわからないふりを？ 怒らないから、教えてくれないか。」

「お母さんのことも怒らない？」

「お母さん？」

「お母さんに言われたんです。吾郎さんが、どんなふうにお勉強を教えるのか見てきなさいって。」

「どうして、お母さんはそんなことを？」

「わかりません。」

落子のお母さん。未婚の母であるというその人が娘を用務員室に送りこんだというのか。なんのために？ などは深まるばかりだが、吾郎はそれ以上の追きゅうをひかえた。代わりに、そこにのしかかつていた重責を担うように、落子の肩に手を置いた。

「帰ったら、お母さんに伝えてくれるかな。何か知りたいことがあるのなら直接会いに来てください、と。落ちゃんも、また用務員室に来たくなつたら、いつでも助手として歓迎するよ。ちようと思つてたところなんだ、ぼくがもう一人いればいいのになつて。」
ようやく落子がほえんだのを見て、吾郎はほつと胸をなでおろした。

(森絵都『みかづき』による)

注 *1 這々の体で…やつのこと。

*2 腐心…よく考えてうまくいくようにくふうすること。

*3 虚をつかれた…思いがけずはつとした。

*4 臆する…氣おくれする。

*5 懇意にしている…心をゆるしてなかよくしている。

*6 垂涎的…ほしくてたまらないもの。

*7 中座…途中でその場からはなれること。

*8 嗚咽…声を上げて泣くこと。

(1) I に入ることばとして最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

ア 四苦八苦

イ 一長一短

ウ 十人十色

エ 一心不乱

(2) II に入る五字以上八字以内のことばを文章中から探し、そのままぬき出しなさい。

(3) —線部①「違和感」とありますが、それがどのようなものかわかる四十字以上五十字以内の部分を文章中から探し、はじめの五字をぬき出しなさい。(句読点などの記号も一字として数えます。)

(4) —線部②「これまた痛いところをつかれた。」とありますが、ここでの吾郎の気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

ア 学校の先生ではないのに子どもに勉強を教えるのが好きだという不自然なところを指摘されてしまった。

イ 子どもに勉強を教えるのは好きでも勉強と関係のないおしゃべりは苦手なところを指摘されてしまった。

ウ 本当は学校の先生になりたかった後悔をかくして子どもに勉強を教えている本心を見破られてしまった。

エ 突然思ってもみない質問をされてしどろもどろになって答えている心の中の動揺を見破られてしまった。

(5) —線部③「それまでゆらぎのなかった落子の瞳が初めて波立った。」とはどういうことですか。これを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

ア 吾郎が明かしたことの意外さに驚いて、いつもはそっけない落子が急にうろたえたように見えたということ。

イ 教師にならなかった理由に深刻な家庭の事情があったことを察して、心を動かされたように見えたということ。

ウ 教師になることができなかった吾郎の無念な気持ちに同情して、落子が涙をうかべたように見えたということ。

エ 社会には子どもにはうかがい知れないような複雑な現実があることを知って、驚いたように見えたということ。

(6) — 線部④「神妙にうなずいてみせた落子」とありますが、このときの落子の様子を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

- ア 吾郎と心が通ったことを感じてうれしそうな様子。
イ 心の動きを吾郎にかくそうとするいじらしい様子。
ウ ようやく吾郎の真意がわかって感動している様子。
エ 幼いなりに吾郎の気持ちを理解しようとする様子。

(7) — 線部⑤「吾郎面」を別の言い方で表している五字以内の表現を、文章中から探し、そのままぬき出しなさい。

(8) — 線部⑥「花をしめらす朝つゆみtainな涙」とありますが、作者はこの比ゆによつてどのようなことを表そうとしているのですか。説明として最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

- ア 落子の涙が心から自然に生まれたもので、思わず吾郎がひきつけられるほど美しいものだったこと。
イ 思わぬできごとに驚いて大笑いしていた吾郎が、落子の涙を見て自分までしみりしてきたこと。
ウ その涙を見た吾郎が落子の愛らしさに心を打たれたことから、物語が新たな展開に入っていくこと。
エ 吾郎がやっと本当の落子に気づいたように、その涙には人の目を開かせるふしぎな力があること。

- 8 -

(9) この文章の話の進みかたや表現のしかたの持ちようを説明したものとして、最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

- ア 用務員室で勉強にはげむ子どもたちの姿が生き生きとえがかれ、読者がその中の一人の少女の気持ちに寄りそっていくるように語られている。
イ 始めに年代や具体的な地名を明らかにしておくことで、読者がかつての日本人の送っていた生活をなつかしんで思い出せるように語られている。
ウ 主人公とのふれ合いを通じて一人のなぞめいた少女のことが明らかになっていく過程で、また次のなぞが読者に示されるように語られている。
エ めぐまれない境遇きょうぐうにあつても理想をつらぬこうとする主人公を通して、現代の学校がかかえる問題点を読者につきつけるように語られている。

(10) 文章中の **キュウイン** を漢字に直しなさい。(ハネやハライなどの点画もきちんと書くこと。)

- 9 -

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ネコに限らず、ライオンでもネズミでも多くの動物は、初めて見るものを警戒します。仮に、ノラネコを一匹、アライグマ用のわなで捕まえて、動物園のライオンのおりの広さのところにに入れて観察するとしましょう。

おりのなかには隠れ場となる巣箱などを入れておきます。わなごとおりに運び込み、扉を開けてみると、ネコは喜び勇んでわなから飛び出すと思いきや、わなの中でじっとしています。

ビクついているのかな……いっこうに出てくる気配がないから、わなの扉からのぞくと、たちまち「シャーッ！」と怒りの洗礼を受けます。そりゃそうだ、たいそう怒っているのです。

怒りながらも、見知らぬ環境に怯えているのか、わなからは出てくる様子はありません。仕方がないので、静かにその場を離れて、物陰からそっと観察します。

ネコはわなの中で毛づくろいをして、気を落ち着かせようとしています。そしてときおり、鼻面をわなの扉からのぞかせて、外の空気をすっています。自分が置かれている立場を、まずは鼻と耳で判断しようとしているのです。

いよいよ出てくるな、と期待するとスッと引込んでしまう。こんなことを繰り返して、出てくる気配すらなくなってきました。出てくればいいのに……と、こちらがじりじりと気をもむばかり。

① こりや長期戦だわ、と座り直したところに、頭ひとつが扉から出てきました。さて、いよいよだ、と構えると、ネコはまだ警戒しているようです。

わなにかかったときは悔しがって大暴れしたくせに、いまやわなから離れるのがつらいといったそぶり。この変貌ぶりはなんなんだ、などと考えていると、ようやく、へっぴり腰で全身を現しました。

ゆつくりと慎重におりの縁へ進み、おりの金網に沿って歩き始めます。② これをネコは気が弱いからだとか、臆病だからだという人もいますが、そうではありません。世界最強のトラだって異常を察知すると警戒して動かないのです。

ある動物園でトラの力を測定しようとしたことがありました。放飼場に機器を設置し、いよいよ測定という段になって、寝部屋からトラを放飼場に出そうとすると、トラは開けた扉から放飼場の様子をチラリと見ただけで引込んでしまいました。

実は、いったん警戒したらもうテコでも動かないのがトラの性分です。臆病な奴だ

とあざけってはいけません。警戒心の強さは、生きるうえで欠かせないものだからです。

さて、ようやくしてわなから出たネコは、ここでこちらが少しでも動くものならギクツとして固まり、「フリーズ」し、十分以上固まっていることもあります。こちら③ も「」を殺して静かにしていると、ネコはやがてゆつくりと歩きだしました。

室内をひとまわりするとネコは少し大胆になり、そのまま歩き続けます。次第に大胆になり、こちらが少し物音を立てても、もはやフリーズすることはありません。おりの金網から人間が入ってこないことを理解したようです。

ネコは歩きながらあたりを偵察しています。巣箱に入っても中でくつろぐわけでもなくすぐにでてきてしまうから、隠れ場を探しているわけではないようです。匂いを嗅ぎ、よく見て、音を聞き、情報を入手しています。

未知のおりに入ったネコは、新しい経験、初めての環境から大量の強烈な刺激を受け、逃げて隠れたりする行動ではなく、ひたすら探索行動をとっているのです。④ ともかく、わなから出たときの用心深さは微塵もなく、図太さを感じるほど、堂々と歩きまわります。

ところが、翌日になってそっとおりの前に行き、観察を始めると、前日の堂々たる歩きは見せてくれません。どうかしたのか？ と、心配になるほど様子がちがいます。

巣箱の中をそつとのとと、中で丸まって眠っており……いや、ピクリと動く耳を見ると、起きているけれど動かないのでした。また活動を延々と待つことになり、ネコが動きだすのは薄暗くなってからです。

おっかなびっくり姿を現してはこちらの気配にフリーズしたり、一方では堂々と我が物顔でパトロールをしたり。あのときの姿はどこへ行ったのかとふしぎに思ってしまうほど、⑤ 極端な二面性です。

ネコのなかでは、「あれは何だろう？ ここはどこだろう？」という気持ちと、「見知らぬ場所・物だ、身を隠せ！」という気持ちが大天秤に載って、グラグラとせめぎ合っていたのでしょう。強い探索心と強い警戒心はネコの特徴的な気質であり、進化を重ねるうえで身につけた生存戦略でもあるのです。

おりのなかのネコの様子をもう少し紹介しましょう。巣箱の中で丸まっていたネコですが、周囲が薄暗くなってから、いきなり活動をはじめました。

巣箱から出るとゆつたりと伸びをして、あたりの空気を嗅ぎ、足早に歩きはじめま

す。その姿はまるでヤマネコのようにです。おりの隅に行つて匂いを嗅いで点検し、それから水を飲み、フードの匂いを嗅ぎ、食べようか食べまいか思案している様子です。

こちらが急に動こうものなら、おりのどこにしようともネコは脱兎のごとく巣箱に飛び込みます。前日の堂々たる歩きはなく、すっかり用心深さを取り戻しています。

驚いて巣箱に入つてしまうと、もうなかなか出てきません。前日の歩きは、おりになれたからではなく、探索心が強かつた証拠でしょう。

警戒して巣箱に飛び込む速さは⑥にも留まりません。このすばやさは、前日からの探索行動の成果です。ぐるぐるとまわつていたあの行動で、室内にある巣箱や水入れ、フード入れの位置関係を把握しており、おりの中の「地理・地形」をネコは記憶していたのでした。夜目が利くとはいえ、薄暗い室内で反射的に巣箱に飛び込めるのは、記憶から成る感覚なのです。

⑦一週間もすると、室内はすっかりネコの世界です。室内にあるあらゆる物とその配置を知り尽くしており、驚くようなすばやさで飛ぶように移動します。

そこへ、見慣れない新型のわなを置いてみます。すると、無視しているのかと思うほどに何事もないそぶりでネコは歩きまわります。

これは無視しているのではなく、室内を歩きながら、不審物を偵察しているのです。数十周もすると、ようやく新型のわなに近づくようになり、より詳細に観察し、最後には匂いを嗅いで、二度と近寄ることはありません。

最初に捕らえたときに比べるとネコの警戒心はぐんと高まつており、見た目が異なつていても二度とわなには入りません。臆病とも思えるほどの用心深さは⑧知能の高さと相まつてネコの性質をかたちづくっています。

(今泉忠明『飼猫のひみつ』による)

注 * フリーズ……動きを止め、停止状態になること。

(1) ——線部①「こりゃ長期戦だわ」とありますが、「長期戦」とはどのようなことに長い時間がかかることを表現したのですか。それを説明した次の文の()に当てはまる語句を十五字以内で答えなさい。

() こと。

(2) ——線部②「これをネコは気が弱いからだとか、臆病からだ」という人もいますが、そうではありません。」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

ア 自分をわなで捕まえた人間をおそれることは、人間をうらんでいる動物にとって当然の行動だから。

イ 初めての環境に対して用心深くなることは、多くの動物にとって生きていくために必要な行動だから。

ウ 何か異常がないか確認しながら行動することは、トラよりも力が弱いネコにとって大切な行動だから。

エ 元の場所に急いで戻れるようにしておくことは、動物が見知らぬ環境で安全を保つために重要な行動だから。

(3) ——線部③「()を殺し」と、——線部⑥「()にも留まりません。」には、慣用句がふくまれています。それぞれの()に入る語を漢字一字で答えなさい。

(4) ——線部④「わなから出たときの用心深さは微塵もなく、図太さを感じるほど、堂々と歩きまわります。」とありますが、この時にネコが堂々と歩きまわった理由として最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

ア 初めての場所にとまどつていたが、歩き回つておりの中の情報を大量に入手することができ、恐怖心がなくなったから。

イ 新しい経験や初めての環境から受ける強烈な刺激が、本当は用心深いはずのネコの感情をかき乱し、冷静さを失わせたから。

ウ 人間をこわがっていたが、おりの中には入ってこないことがわかり、逃げたり隠れたりしなくてもよいことを理解したから。

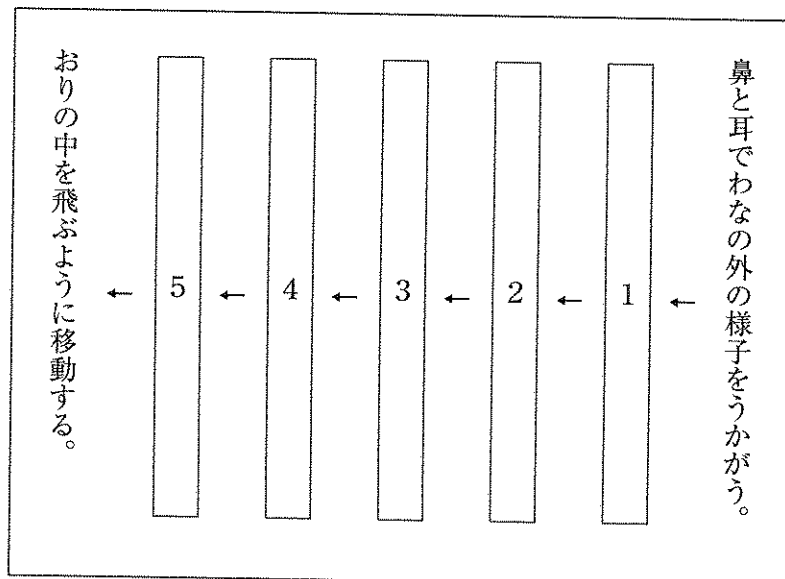
エ 自分の身のまわりのことをよく知りたいという気持ちだが、初めての環境に対する用心深さよりも強くなり、大胆になったから。

(5) ——線部⑤「極端な二面性」が表す内容について説明している部分を文章中から探し、十字以上十五字以内でぬき出しなさい。

(6) — 線部⑦「一週間もすると、室内はすっかりネコの世界です。」とありますが、次の図は、室内（おりの中）が「ネコの世界」となるまでにネコがとった行動を順に並べたものです。

1 5

中からそれぞれ選びなさい。



- ア おりのはしに沿って歩く。
- イ わなの外に頭だけを出す。
- ウ 周囲を気にせずに歩き回る。
- エ 薄暗くなるまで巣箱に隠れる。
- オ 人間の動きを察知して固まる。

(7) — 線部⑧「知能の高さ」とありますが、この文章では、ネコのどのような「知能の高さ」について書かれていますか。最も適当なものを、次のア～エの中から選びなさい。

- ア 身を隠しておくのに適切な場所や堂々と歩き回っても安全かどうかについて、すばやく判断することができること。
- イ どのようにすれば安全を確保できるかや反射的に移動するための方法について、深く考えていくことができること。
- ウ 自分がいる場所にどのようなものがあるかや目の前に置かれた不審物について、興味を持ち続けることができること。
- エ 探索してわかった身のまわりの環境や自分に危険をおよぼす可能性があるものについて、覚えておくことができること。

国語 解答用紙 (平成三十年度)

【三】	

【三】			
(10)	(6)	(3)	(1)
	(7)		(2)
		(4)	
		(5)	
	(8)		
	(9)		

【三】			
(6)	(5)	(2)	(1)
↓			
↓		(3)	
		③	
↓			
		⑥	
↓			
(7)		(4)	

受験番号	
------	--

(国語)

※記入しないこと